

令和5年度（2023年度）

浦和明の星女子中学校入学試験問題
（第 一 回）

国 語

（50 分）

注 意

1. 試験の開始まで問題用紙を開かないこと。
2. 問題用紙は全部で10ページある。試験開始と同時にページ数を確認すること。
3. 答えはすべて解答用紙の決められたところに、はっきり書くこと。なお、解答用紙の※印欄のところは記入しないこと。
4. 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書くこと。
5. 印刷のはっきりしないところがある場合は、手をあげて係の先生にきくこと。
6. 字数制限のある場合は、句読点も一字と数えて答えること。

受験番号

〔一〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。「 内の表現は、直前の語の意味です。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

これは、とある農村での話である。この村の住民はそれぞれ、自宅でウシを飼っていた。ウシたちは、村共有の牧草地で放牧され、草を食んで暮らしていた。村人は、ウシの乳をしばったり、ときにウシを市場に売ったりしてくらしの足しにしていたのである。こういう状況がながく続き、村人たちの生活は安定していたのだが、ある日、知恵のはたらく村人が、自分の飼うウシの数を増やすことにしたのである。子ウシを何頭も買ってきて共有地で放牧し、大きくなったら売りさばく。こうしてこの村人は成功し、財をなしたのである。

これを見ていたほかの村人たちは「よし、おれもウシの数を増やそう」と思い立ち、その結果村の共有地で放牧されるウシの数が激増するに至った。しかし、共有地の面積にはかぎりがあり、そこで育つ牧草の量にもかぎりがある。やがて牧草は食べつくされ、ウシたちはみんな飢え死にしまった。結局村人たちはみなお金を損して、不幸になってしまった。これが 共有地の悲劇 という寓話(教訓的な話)である(ギャレット・ハーディンという有名な環境科学者の著作に登場するお話だ)。

共有地の悲劇の寓話が興味深いのは、 人間が環境問題を引き起こすメカニズムの核心をついているからだ。この物語の登場人物は、けっしてバカではない。それどころか、みんな毎日を精いっぱい生き、なんとかして自分や家族のくらしをゆたかにしようと知恵をしばり工夫をこらしているのだ。彼らはバカじゃないから、ウシの数が増えすぎたらやがて牧草が食べつくされて悲劇が起こることも予期している。しかしそれでも、彼らはウシの数を減らさない。どうせ自分が減らしたって、ほかの村人がどんどんウシの数を増やすのが目に見えているからだ。将来はこのゲームの参加者全員が敗者になることが分かっている、いまこの瞬間、お金を稼ぐのをやめられないのである。こういう現象は、寓話の世界だけじゃなく、現実が起こっている。たとえば現代の日本でも。

最近、ニホンウナギが絶滅危惧種に指定された。日本人が a ドヨウの丑の日などに好んで食べるウナギだけど、近年では数が極端に減って、絶滅危惧種になってしまったのである。その原因はいろいろあるんだけど、最大の原因は「獲りすぎ」である。食用のウナギといえば養殖モノが主流だけど、ウナギの完全養殖はまだまだ実験段階だ。飼育下のウナギにタマゴを産ませてふ化させて、稚魚を成魚になるまで育てるのを完全養殖というが、それはとてもむずかしいことなのだ。じゃあどうやってウナギの養殖をしているかというと、海で自然にふ化してあるていどのサイラスウナギに起こっている悲劇との決定的な違いをわかってもらえただろうか。

僕ら人間は、私有物の場合は後先考えながら大事にあつかうが、共有物は粗末にあつかう。こういう人間の性が出るのが共有地の悲劇なのである。「いやいや、僕ら日本人の大半には良心というものがあって、共有物だからといって無茶はしない。むしろ共有物こそ大切にするように教わっている」なんて反論もあるかもしれない。それはそのとおりである。良識ある人びとは、共有地の悲劇を避けるために自制心をはたかせることが可能なのだ。しかし、ほんのひと握りの人たちが、密漁などの無茶をすることによって、社会や自然環境に深刻な被害がおよんでしまう。これが共有地の「悲劇」と呼ばれるゆえんだ。一部の欲望に忠実な人たちの行動が環境問題を生み出してしまうのである。

さらに言おう。僕ら日本人の大半はシラスウナギの密漁をしない。ならばウナギの激減問題に潔白かというと、そうでもないのだから。 Y のは僕ら多くの日本人。僕ら日本人がお金を払って Y から密漁が存在するのである。僕らが Y ことが問題の原因であり、僕らは間接的にウナギの激減に手を貸していると言ってしまうのだ。

共有地の悲劇を避けるにはどうすればいいか。ひとつの方法は、すべてを私有物にすることだ。しかしこれ、現実には不可能なことも多々ある。完全養殖が実用化できていないウナギもそう。日本列島から遠く離れたフィリピン近海の深い海で産卵するウナギを完全に私有物にすることは不可能だ。後述するが、世界人類の共有物である大気が発生している地球温暖化も共有地の悲劇の典型例だ。共有地の悲劇を避けるもうひとつの方法は、ルールづくりである。ひと握りの無法者が無茶をしないように、社会でルールをつくって、それをみんなが守るように監視し、違反者にはしかるべき措置を b コウじる。これによって共有地の悲劇を避けることは、理論上は可能である。現に、環境を破壊する行為はこれまで、国内の法律や国際的な条約によって規制されてきて、一定の成果をあげている。ただしこのような規制は万能とは程遠く、多くの問題やほころびが露呈(あらわれ出る)している。早いもん勝ち、獲ったもん勝ちという考え方は世界に蔓延(まんえん)していて、アマゾンの熱帯雨林の違法伐採とか、貴重な野生動物の密猟とか、世界中で 枚挙のいとまがないほど共有地の悲劇の実例が存在している。

よく、人間も生物の一種であるから、人間が起こす環境問題も自然現象である。

ズまで成長したウナギの稚魚(シラスウナギ)が海から川にもどつてくるところをつかまえて、養殖池に投入して大きくなるまで飼育するのだ。これがウナギの養殖の実態である。

このシラスウナギ漁は、たいへん儲かる仕事である。まっくらな夜中、集魚灯のあかりにおびき寄せられるウナギの稚魚を網ですくう。これだけで一晩に数十万円もの儲けになることもあるらしい。なんせ、シラスウナギは俗に「白いダイヤ」と呼ばれるくらいで、この漁はお金の儲かる仕事。そして ③ に乗じてやる仕事だけに、正式の許可を得ていない密漁者が後を絶たない。こうして日本じゅうでシラスウナギの乱獲が行われ、ウナギが激減するに至ったのである。

〈中略〉

このように、公共の場所である河川で、誰の所有物でもないウナギの稚魚を獲るという行為には、人間がエゴをむき出しにして、たとえ将来絶滅しようが後先考えず今だけの利益のために行動するよう仕向けるメカニズムが存在している。密漁者たちも当然、シラスウナギが年々減少していることを自分の身をもって痛感しているだろう。それでも、自然環境保全のために密漁をやめるといえば、そうではない。自分ひとりがやめても、ほかの誰かが採ってしまえば、結局は破滅に向かうからだ。どうせウナギ産業が破滅するのなら、いまのうちに少しでもお金を稼いでおこう。こういう考え方がこそ、共有地の悲劇を生んでいる。

読者のみなさんは気づいたことだろうか。共有地の悲劇が生じるのは、収奪される対象物が X 場合である。公共物と私有物の違いはたいへん重要で、この違いが共有地の悲劇の発生を決定づけている。ひとつ例を考えてみよう。現代の日本において、肉牛は私有物である。野良犬みたいな野良牛がそのへんを歩いて、誰の持ち物でもない、なんてことはあり得ない。そして、ウナギと異なり肉牛の繁殖法は確立されている(飼育下で子ウシを産ませて成長させることが可能だ)。つまり肉牛は、完全に私有物として管理されているのである。

ここで、もし松阪牛のステーキを食べることが空前絶後の大ブームになって、肉が高く売れるようになったらどうなるか考えてみよう。松阪牛の生産者組合は「いまだけ儲かればいい」と考えてすべての牛を出荷してしまうだろうか。そうすると、松阪牛は絶滅し、血統が途絶えてしまう。もう松阪牛でお金を儲けることはできない。だからそんなバカなことは絶対にしないのである。

そう、いくら松阪牛がブームになって高く売れるからといって、親となる牛たちまでみんな出荷して食べちゃう、なんてことはない。牧畜業者のみなさんは後先考えだから止める必要はないし、止められない。人間は本能という名の欲望に沿ってあるがままに振舞えばよいし、いつか人間が絶滅するならそれも自然現象だから仕方ない、なんていう人がいる。この考え方を受け入れてしまうと、環境保全などを考えるのは無意味になってしまう。なのでこの本の最初の章で、この話を扱うことにした。

人間はもともと利己的に振舞うものだ。これは否定のしようがない。人類の祖先は数百万年前に生まれて、それからずっと、つい一万年前くらいまでは、狩猟採集で食べものを得る原始時代(旧石器時代)のくらしを送っていた。農耕や牧畜がはじまる前の原始時代のくらしはたいへんきびしく、人類の人口はとても少なかった。彼らは小さなグループをつくり広大な土地で食べものを探していたから、人口密度はとても低かったのである。

太古のむかしに思いを馳せてみよう。人口密度が極端に低い時代の彼らにとって、地球のサイズは無限と考えても問題がなかった。どんなにがんばっても地球の資源を使いつくすことはできなかったのだ。だから、ひたすらできる限りの資源の収奪を行うことが、彼らにとってベストな戦略だったのだ。原始時代のこのような環境では、現代のような環境問題は生じない。原始人がごみを捨てたところで、それは広大な土地や水や大気ですぐに薄められてしまう。だから現代のような公害は発生しなかったのだ。だから原始人には、環境意識はなかなか生まれなかったことだろう。

やがて農耕や牧畜が始まった。すると食料が安定して供給されるようになり、人口密度が増加する。それと同時に人びとは定住生活をするようになる。人間のライフスタイルがこのように変わっていくと、原始時代のように後先考えずに資源を使い切ってしまうと困ることが増えてきた。人口が増えてテクノロジーが進歩するにしたがって、資源を使いつくすというのが現実問題になってきたのである。こうして人びとは次第に、持続可能な利用というコンセプト(考え方)を身に着け、社会のルールや道徳に組み込んで、現代にいたる。人口が増えてテクノロジーが進歩するにしたがって、資源を使いつくすというのが現実問題になってきたのである。しかし、人間はつい一万年くらい前までは旧石器時代を生きていた。人間はそんなに急に変わることはできないので、現代人の遺伝子も ⑥ 原始時代の記憶を引きずっている。だから容易に共有地の悲劇を引き起こす。これは人がもって生まれた性なのである。人間がみんな利他的になったらいよいよね、みたいなのは夢物語である。人間の善意や自己犠牲に頼りきりの環境保全は成立しない。

生物学者である僕は、生物としての人間が持つ性をいやというほどわかってい

る。人間も動物も等しく、生存と繁殖のためのきびしいたたかいを今日まで続けている。そのために、冷徹で合理的な行動を取ることが求められているのだ。それでもなお、^⑦人間は環境問題を解決できると信じている。考えてみれば、人間は後先を考えて、未来の幸せのためにいまがまんすることができる生物である。これが、人間とその他の生物の大きなちがいだ。人類が農耕や牧畜を「発明」したのはこのような性質を持っていたから。ひと握りの小麦や一匹の子ヒツジを手に入れたとき、それらを食べてしまえばすぐに満腹になるし、手間もかからない。しかし人類は、がまんしてそれらを食わずに育てることの意味を知った。苦勞して世話をしして育てることで、将来、より多くの食べものが得られるのである。これは、未来の幸福のためにいまがまんできる理性という人間の特徴が生み出したものである。

だから、僕ら人類は環境問題を解決できる可能性を持っていると思う。いま、ある程度がまんすることで将来僕らや僕らの子孫たちが幸せになれるのなら、そういう選択ができる動物なのだ。環境問題はたいへん深刻だし、共有地の悲劇を生み出す人間の性から逃れることもできない。それでもなお、希望を捨てずに解決を目指すべきだ。これが^⑧楽観的悲観主義者のマインドである。

(伊勢武史 著『2050年の地球を予測する——科学でわかる環境の未来』より)

問1 太線部a「ドヨウ」・b「コウ(じる)」を漢字で答えなさい。

問2 傍線部①「共有地の悲劇」について、次の各問いに答えなさい。

I 次は、「共有地の悲劇」と、この後に説明されるシラスウナギの例との関係を説明した文章です。空欄に入る最も適切な語をそれぞれのA～Dから選び、記号で答えなさい。

「シラスウナギ」は寓話における「1」にあたり、「密漁者」は寓話における「2」にあたる。シラスウナギは「1」と同様に段々と減少し、現在ウナギは絶滅危惧種になっている。

A 牧草 B ウシ C 村人 D お金

問6 傍線部④「シラスウナギに起こっている悲劇との決定的な違い」は、どのような点にありますか。次の空欄A・Bに入る適切な表現を傍線部④以前の本文の中から指定の字数で抜き出し、説明を完成させなさい。

シラスウナギとは異なり、松阪牛は「A 三字」が定まっており、
「B 八字」することができ点。

問7 三つの空欄Yに共通して入る適切な表現を考え、七字で答えなさい。

問8 傍線部⑤「枚挙のいとまがない」の意味として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

A 多くて数えられない I 被害が悪質化する
ウ 考えると気が滅入る エ 絶え間なくつづく

問9 傍線部⑥「原始時代の記憶」の内容として当てはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

A 地球の資源を使いくことは不可能である。
I 狩猟こそが生存に必要な食料確保の手段である。
ウ ごみを捨てたところで環境への影響は生じない。
エ できる限り天然の資源を収奪することが望ましい。

問10 次は、傍線部⑦「人間は環境問題を解決できる」と筆者が考えている理由について述べた文です。空欄に入る適切な語を2ページの本文中から漢字三字で抜き出し、答えなさい。

「人間には」「があるから環境問題を解決できる」と筆者は考えている。

II 「共有地の悲劇」と同様の仕組みで発生する事例として当てはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

A 健康食志向によって魚を食べることが世界的に流行し、マグロやサンマなどの値段が高くなってしまった。

I 節電の呼びかけを行ったものの電力の消費量が増え続け、供給量を上回って地域全体が停電してしまった。

ウ 町内会の地域清掃は面倒だからと皆が参加しなくなった結果、害獣や害虫が増え、住みにくい街になってしまった。

E 伐採した樹木の代わりに植林を進めて環境保全に努めた結果、多くの人が花粉症に悩まされるようになってしまった。

問3 次は、傍線部②中の「人間が環境問題を引き起こすメカニズム」について説明した文です。空欄に入る適切な表現を1ページの本文中から二十字以内で抜き出し、答えなさい。

「人間が環境問題を引き起こすメカニズム」とは、人間が共有地においては「」ことを促す仕組みのことを指している。

問4 傍線部③「」に乗じて」の空欄に入る最も適切な語を次から選び、記号で答えなさい。

A 危険 I 秘密 ウ 夜陰 エ 誘惑

問5 空欄Xに入る最も適切な表現を次から選び、記号で答えなさい。

A 公共の場所であり、誰かの所有物である
I 公共の場所であり、誰かの所有物ではない
ウ 私的な場所であり、誰かの所有物である
E 私的な場所であり、誰かの所有物ではない

問11 傍線部⑧「楽観的悲観主義者のマインド」の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

A 人間は社会全体の繁栄を考えた選択ができる理性的存在であるため、たとえ環境問題が深刻さを増したとしても、新しい技術によって解決する道はあると信じてつづける精神。

I 損害を受けても自己回復力をもって再生してきた自然は偉大な存在であり、人間が利己的だったとしても、環境問題はさほど深刻にならないだろうと前向きにとらえる精神。

ウ 人間はもともと利己的なものであることを受け止めた上で、理性によって未来の繁栄にも目を向けた行動を選択し、環境問題解決に向けて努力しつづけていこうとする精神。

E 農耕や牧畜など集団で繁栄を目指してきた人類であるので、自然の資源が底をついてしまう前に、みんなで未来の人たちのためにがまんを伴う行動も受け入れようとする精神。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

小学六年生の宮本草児は、両親の離婚によって三ヶ月前、母と一緒に祖母の家に引っ越してきた。転校初日に話し方を笑われてしまい、クラスメイトとなじめなかった草児は、祖母ともなじめず、毎日のように放課後は一人で、博物館で過ごしていた。ある日、博物館で三十歳代と見られるスーツを着た「男」に声をかけられたが、警戒して反応せずに立ち去った。次は、それからしばらく経った頃の場面である。

「シフトの都合」で予定外の休みをもらった母は、同じ理由で休みがなくなつた。十連勤だなんて冗談じゃないよとほやいていたのは最初の数日だけで、半ば頃になると家にいる時は無言でテーブルにつぶおしているだけの、物言わぬ生物になつた。祖母はなんだか近頃調子が悪いといつて、日中も寝てばかりいた。

古生代の生物たちも、こんなふうに干渉し合うことなく、暮らしていたのかもしれない。同じ家の中にも、ほとんど言葉を交わさない。母や祖母の気配だけを感じつつ、ひとりで食卓に置かれたパンや釜めしを食べた。

味がぜんぜんわからなかった。給食もそうだ。甘いとも辛いとも感じない。誰かと同じ空間にいても、人間は簡単に「ひとり」になるものだと、こんなふうになるずつと前から知っていた。

博物館の前に立ち、「本日休館日」の立て札を目にするなり、動けなくなつてしまった。今日は木曜日だということをすっかり忘れていた。A 一色の絵の具で塗りつぶしたような毎日の中で、曜日の感覚が鈍っていたのかもしれない。

ワチャーンというような声が頭上から降ってきて、振り返つた。このあいだムササビの骨格標本を見上げていた男が草児のすぐ後ろに立っていた。今日は灰色のスーツを着ている。男の指がすつと持ち上がって、立て札を指す。ちよつと異様ぐらいに長く見える指だった。

「きみ知ってた？ 今日休みって」

「うん」

男があまりに情けない様子だったので、つい警戒心がゆるみ「知ってたけど忘れてた」と反応してしまふ。

「そうかあ」

中に入れないのなら、帰るしかない。背を向けて歩き出すと、男も後ろからついてくる。公園から出るには同じ方向に向かうしかないからあたりまえのことなのだが、気になって何度も振り返ってしまう。

やっぱへんなやつだ、と身を引いた拍子に、手元が狂つた。① 容器の蓋が開いてガムがばらばらと地面にこぼれ落ちる。草児は声を上げなかった。男もまた。映画館で映画を観るように、校長先生の話を聞くように、唇を結んだまま、丸いガムが土の上を転がっていくのを見守つた。

気づいた時にはもう、涙があふれ出てしまつていた。頬を伝っていく滴は熱くて、でも顎からしたたり落ちる頃には冷たくなつていた。

どうして泣いているのか自分でもよくわからなかった。ガムの容器の蓋をちゃんとしていなかったこと。博物館の休みを忘れていたこと。男が蒲焼きさん太郎を差し出した時に蘇つた、文ちゃん（出題者注：保育園からの付き合いがある、前の学校の同級生。頼りがいはあるが、草児は彼との力関係に悩んでいた。）と過ごした日々のこと。楽しかった時もいっぱいあった。

それなのに、どうしても文ちゃんに嫌だと言えなかったこと。嫌だと言えない自分が恥ずかしかったこと。別れを告げずに引越してしまつたこと。父が手紙をくれないこと。自分もなにを書いていいのかわからないこと。② 今日も学校で、誰とも口をきかなかったこと。算数でわからないところがあったこと。でも先生に訊けなかったこと。

母がいつも家にいないこと。疲れた顔をしていること。祖母から好かれているのか嫌われているのかよくわからないこと。いつも自分はここにいていいんだろうかと感じること。

男は泣いている草児を見てもおどろいた様子はなく、困惑するでもなく、かといつて慰めようとするでもなかった。③ ただ「いろいろ、あるよね」とだけ、言つた。

「え」と訊きかえた時には、涙はとまっていた。いろいろ、と言つた男は、けれども、草児の「いろいろ」をくわしく聞きだそうとはしなかった。

「いろいろある」

草児が繰り返すと、男は食べ終えたうまい棒の袋を細長く折って畳みはじめる。

「ところできみは、なんでいつも博物館にいるの？」

「だよね、いつもいるよね？」と質問を重ねる男は、草児がいつもいるとわかるほど頻繁に博物館を訪れているのだ。

「恐竜とか、好きだから」

大人に好きなものについて訊かれたら、かならずそう答えることにしている。嘘ではないが、太古の生物の中でもとりわけ恐竜を好むわけではない。にもかかわらずそう言うのは「そのほうがわかりやすいだろう」と感じるからだ。そう答えると、

「どうしたの？」

草児の視線を受けとめた男が、ゆつたりと口を開く。なにを勘違いしたのか「なに？ 腹減つてんの？」と質問を重ねる。違う。とつさに答えたが、嘘だった。腹は常に減っている。

男のアクセントはすこしへんだつた。このあたりの人とも、草児とも違う。そのくせ、すこしも恥じてはいないようだ。

「あ、これ食う？」

書類やノートパソコンが入っているような鞆から、蒲焼きさん太郎が出てきた。差し出されたそれを草児が黙って見ていると、男はきまりわるそうに下を向き、包装を破いて、自分の口に入れた。

「そうだよな、あやしいよな。知らないおじさんが手渡してくる蒲焼きさん太郎なんか食べちゃだめだ」

しつかりしてるんだな、えらいな、うん、と勝手に納得し、男はベンチに座つた。鞆から、つぎつぎとお菓子が取り出される。いくつかのお菓子には見覚えがあり、そのほかははじめて目にする。うまい棒とポテトスナックは知っているが、なんとかボールと書いてあるお菓子は知らない。

「あの、なんで、そんなにいっぱいお菓子持つてるの？」

おそろおそろ問う。この男は草児が知っているどの大人とも違う。男はすこし考えてから「さあ？」と首を傾げた。自分自身のことなのに。

「安心するから、かな」

うまい棒を齧りながら、男は「何年か前に出張した時に」と喋り出した。帰りの新幹線が事故で何時間もとまったまま、という体験をしたのだという。いつ動き出すのかすらまったくわからなくて、不安だった。でも、新幹線に乗る前に売店で買ったチップスターの筒を握りしめてみると、なぜか安心した。その時、思いもよらないものが気持ちを支えてくれることもあるんだな、と知った。あれは単純に「食料がある」という安心感ではなかった、たとえば持っていたのが乾パンなどの非常食然としたものだったらもっと違った気がする、だからお菓子というものは自分の精神的な命綱のようなものだと思つたのだ、というようなことをのんびりと語る男に手招きされて、草児もベンチに座つた。いつでも逃げられるように、すこし距離をとりつつ。

草児が背負っていたリュックからオレンジジュースのボトルを出すと、男は「なんだよ、持つてるじゃないか」とうれしそうな顔をする。自分のガムはただのおやつであつて、命綱なんかではない。

大人は「ああ、男の子だもんね」と勝手に納得してくれる。

「あと、もつと前の時代のいろんな生きものにも、いっぱい、いっぱい興味がある」他の大人の前では言わない続きが、するりと口から出た。

④ エディアカラ紀、海の中で、とつぜんさまざまなかたちの生物が出現しました。体はやわらかく、目やあし、背骨はなく、獲物をおそうこともありませんでした。エディアカラ紀の生物には、食べたたり食べられたりする関係はありませんでした。図鑑を暗誦した。

草児は、そういう時代のそういうものとして生まれたかった。同級生に百円をたかられたり、喋つただけで奇異な目で見られたり、こっちはこっちでどう見られているか気にしたり、そんなんじゃないやなく、静かな海の底の砂の上で静かに生きているだけの生物として生まれたかった。

「行つてみたい？ エディアカラ紀」

唐突な質問に、うまく答えられない。この男は「エディアカラ紀」を観光地の名かなにかだと思つていてのではないか。

「タイムマシンがあればな」

でも操縦できるかな。ハンドルを左右に切るような動作をしてみせる。

「バスなら運転できるんだけどね。おれむかし、バスの運転手だったから」

男の言う「むかし」がどれぐらい前の話なのか、草児にはわからない。わからないので、黙って頷いた。むかしというからは今は運転手ではなく、なぜ運転手ではないのかという理由を、草児は訊ねない。男が「いろいろ」の詳細を訊かなかつたように。

男がまた、見えないハンドルをあやつる。

一瞬ほんとうにバスに乗っているような気がした。B バスが、長い長い時空のトンネルをぬけて、しぶきを上げながら海に潜っていく。いくつもの水泡が、窓ガラスに不規則な丸い模様を走らせる。

視界が濃く、青く、染まっていく。

海の底から生えた巨大な葉っぱのようなカルニオデイスクス。楕円形にひろがるデッキンソニア。ゆつたりとうごめく生きものたち。自分はそれらをいちいち指さし、男は薄く笑って応じるだろう。バスは音も立てずに進んでいく。砂についたタイヤの跡はやわらかいカーブを描き、その上を、図鑑には載っていない小さな生きものが横断する。

そこまで想像して、でも、と呟いた。

「もし行けたとしても、戻つてこられるのかな？」

タイムマシンで白亜紀に行ってしまうアニメ映画を、母と一緒に観たことがある。その映画では、途中でタイムマシンが恐竜に踏み壊されていた。その場面は強烈に覚えているのに、主人公が現代に戻ってきたのかどうかは覚えていない。

男が「さあ」と首を傾げる。さつきと同じ、他人事のような態度で。

「戻ってきたいの？」

そりゃあ、と言いかけて、自分でもよくわからなくなる。

「だって、えっと……戻ってこなかったら、心配するだろうから」

草ちゃんはどこにでも行けるように、と母は言ってくれるが、タイムマシンで原生代に行って二度と帰ってこなかったら、きつと泣くだろう。

「そうか。だいたい人がいるんだね」

おれもだよ、と言いながら、男はゆっくりと、草児から視線を外した。

⑤「タイムマシンには乗れないんだ。仕事をさぼって博物館で現実逃避するぐらいがセキノヤマなんだ、おれには」

「さぼってるの？」

男は答えなかった。意図的に無視しているとわかった。そのかわりのように「ねえ、だいたい人って、たまにやつかいだよ」と息を吐いた。

「なんで？」

「やつかいで、だいいだ」

空は藍色の絵の具を足したように暗く、公園の木々は、ただの影になっている。きみもう帰るな、とやつぱりへんな、すくなくとも草児にはへんだと感じられるアクトセントで言い、男が立ち上がる。うまい棒のかけらのようなものが空中にふわりと舞い散った。

⑥いつもと同じ朝が、今日もまた来る。

トースターに入れたパンを、^a焦がしてしまつて、家を出るのがすこし遅れた。教室に入つて宿題を出し、椅子に腰を下ろすと同時に担任が教室に入ってきた。あー！誰かが甲高い叫び声を上げる。担任はいつものジャージを穿いていたが、上は黒いTシャツだった。恐竜の絵が描かれている。

「ティラノサウルス！」

誰かが指さす。せんせーなんで今日そんなかつこうしてんのー、と別の誰かが笑う。彼らは先生たちの変化にやたら敏感で、髪を切ったとか手をケガしたとか、そういうしたことにはいちいち気づいて指摘せずにはいられないのだ。

「ちがう」

⑦すこしずつ、すこしずつ、画用紙に色鉛筆で色を重ねるように季節が変わつていつ、草児が博物館に行く回数は減つていった。

体育館の靴箱の前で声をかけてきた男子の名は、^a杉田くんという。杉田くんは塾とピアノ教室とスイミングに通っているから一緒に遊べるのは火曜日だけだ。そして、教室で話す相手は彼だけだ。それでももう、以前のように透明の板に隔てられているという感じはしなくなった。完全に取っ払われたわけではない。でも、透明のビニールぐらゐになった気がしている。その気になればいつだって自力でぶち破れそうな厚さに。

「外でごはん食べよう」

帰宅した母が、そんなことを言い出す。突然なんなのと戸惑う祖母の背中を押すようにして向かった先はファミリーレストランだった。草児がそこに行きたいとせがんだからだ。

もつとぜいたくできるのに、と母は不満そうだったが、草児はぜいたくでなくてもよかった。ぜいたくとうれしいは、イコールではない。

体調不良が続いていた祖母も、今日はめずらしく調子が良いようで、うすく化粧をして、明るいオレンジ色のカーディガンを^b羽織っている。四人がけの席につき、メニューを広げた。

「急に外食なんて、どうしたの」

草児が気になっていたことを、祖母が訊ねてくれる。頬杖をついていた母が「パートのわたしにも賞与が出たのよ」と言うなり、唇の両端をにいつと持ち上げた。

「それはよかった」

「それはよかった」

祖母の真似をしてみた草児に向かって、母がやさしく目を細める。

賞与の金額の話から、^Eコティンサンゼイが、ガクシホケンがどうのこうのというつまらない話が始まったので、草児はひとりドリンクバーにむかう。

グラスにコーラを注いで席に戻る途中で、あの男がいるのに気づいた。

男は窓際の席にいた。ひとりではなかった。四人がけのテーブルに、誰かと横並びに座っている。

男の連れが男なのか女なのか、草児には判断できなかった。髪は背中に垂れるほど長く、着ている服は女もののものであるのに、顔や身体つきは男のようだ。

ふたりはただ隣に座っているだけで、触れあっているわけではない。にもかかわらず、近かった。身体はたしかに離れているのに、ぴったりとくっついていよう

声を発したのが自分だと気づくのに、数秒を要した。みんながこちらを見ている。心の中で思ったことを、いつのまにか口に出していた。

担任から促されて立ち上がる。^C椅子が動く音が、やけに大きく聞こえる。

「ちがう、というのはどういう意味かな？ 宮本さん」

「……それはアロサウルスの絵だと思います」

「なるほど。どう違うか説明できる？」

「時代が違います。ティラノサウルスは白亜紀末に現れた恐竜で、アロサウルスは、ジュラ紀です」

すべて図鑑の受け売りだった。

「続けて」

「えっと、どちらも肉食ですが、ティラノサウルスよりアロサウルスのほうが頭が小さい、という特徴があります」

ずっと喋らないようにしていた。笑われるのは無視されるよりずっと嫌なことだった。おそろおそろ視線だけ動かして教室を見まわしたが、笑っている者はひとりもいなかった。何人かは驚いたような顔で、何人かは注意深く様子をうかがうように、草児を見ている。

「ありがとう。座っていいよ。宮本さん、くわしいんだな。説明もわかりやすかつたよ」

感心したような声を上げた担任につられたように、誰かが「へー」と声を漏らすのが聞こえた。

「じゃあ、国語の教科書三十五ページ、みんな開いて」

なにごとともなかったように、授業がはじまる。

国語の次は、体育の授業だった。体操服に着替えて体育館に向かう。体育館はいつも薄暗く、壁はひび割れ、床は傷だらけで冷たい。草児はここに来るたび、うっすらと暗い気持ちになる。

体育館シューズに履き替えていると、誰かが横に立った。草児より小柄な「誰か」はメガネを押し上げる。

「恐竜、好きなの？」

「うん」

草児が頷くと、^Dメガネも頷いた。

「ばくも」

そこで交わした言葉は、それだけだった。でも誰かと並んで立つ体育館の床は、ほんのすこしだけ、冷たさがまじに感じられる。

に見える。

男の前には湯気の立つ鉄板がある。男は鉄板上のハンバーグをナイフですいと切つて、口に運ぶなり「フーファ」というような声を上げた。ムササビの骨格を見上げておどろいていた時とまったく同じ、間の抜けた声だった。

「あつつい」

「うん」

「でもうまい」

「ね」

男とその連れは視線を合やすことなく、短い言葉を交わす。声をかけようとした時、ふいに男が顔を上げた。挨拶しようとした草児の手が、宙で止まる。男の首がゆっくりと左右に動くのに気づいたから。

男の視線が鉄板にかがみこんでいる隣の人間に注がれたのち、草児の母と祖母がいる席に向いた。迷いなくそちらを向いたことで草児は、男がとくに自分に気づいていたと知る。

⑧もう一度男が首を横に振った。口もただけが微笑んでいた。だから草児も片手をゆっくりとおろして、自分の席に戻る。

男の隣にいる人間が男であるか女であるかは判断できないままだったが、そんなことは草児にとっては、どうでもいいことだった。あの人はきつと、⁹男が靴にしのばせているお菓子のような存在なんだろうなと勝手に思った。というよりも、そうでありますように、と。

「いろいろある」世界から逃げ出したくなった時の命綱みたいな、「やつかいだけどだいじな人」とあの男が、ずつとずつと元気でありますようにと、名前も知らない彼らが幸せでありますようにと、神さまにお願いするように思った。

「なにかいいことがあった」

コーラにストローをさす草児に、祖母が問う。はてなマークがついていなくても、ちゃんとわかる。いつのまにかわかるようになった。祖母は今、たしかに自分に問いかけている。

「なんにも」と答えた自分の声がごまかしようがないほど弾んでいて、草児は笑い出してしまふ。ひとくち飲んでみたコーラはしっかりと甘かった。そのことが草児をさらに笑わせ、泣きたいような気分にもさせる。

(寺地はるなの文章による)

問1 太線部a「焦(がし)」・b「羽織(つて)」の読みをひらがなで答えなさい。

問2 傍線部①「容器の蓋が開いて――しまっていた」から読み取れる内容として適切でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア こぼれ落ちる丸いガムの一つひとつに、草児は今まで胸の奥にしまっていた出来事や心情を重ね合わせている。

イ 家族やクラスメイトに対して草児が常々感じていた疎外感を、こぼれ落ちる丸いガムが呼び起こしてしまった。

ウ 丸いガムがこぼれ落ちるのをただ黙ってみている草児の様子は、人間関係を何も変えられないでいる草児を映し出している。

エ こぼれ落ちる丸いガムがもったいなくて思わず泣いてしまったことで、草児は今までにあったつらい出来事を思い出してしまった。

問3 傍線部②「今日も――なかった」とありますが、草児が誰とも口をきかなかった理由にあたる「文」を7ページの本文中から抜き出し、始めの四字を答えなさい。

問4 傍線部③「ただ――とまっていた」について、次の各問いに答えなさい。

I 草児は「『え』と訊きかえした」とありますが、その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 草児が泣き出したことに対し、「男」があせつたり慌てたりする様子もないのが意外だったから。

イ 草児の涙の理由が家庭や学校での出来事にもあるということと、「男」に気づかれたと思ったから。

ウ 草児が泣き出すことになったいろいろな理由を、「男」がこのあと聞き出すのだろうと警戒したから。

エ 草児自身でも涙の理由が分からない中で、「男」が自分に寄り添おうとしていることに戸惑ったから。

問8 傍線部⑦「すこしずつ、――減っていった」から読み取れることとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 草児が周囲の人と新しい関係を築いていき、それまで大切にしていたものを軽んじるようになったということ。

イ 草児が自分をとりまく世界との心理的距離を次第に縮めていき、周囲の人たちとのつながりを深めつつあるということ。

ウ 草児は同じ毎日の繰り返しで変化がないと思っているが、草児の気づかないところで確実に変化が起きているということ。

エ 草児をとりまく世界が本人とは関係のないところで次々と変化し、その対応に追われるようになった草児は忙しくなったということ。

問9 傍線部⑧「もう一度男が首を横に振った。口もとだけが微笑んでいた」とありますが、次はそのような行動をとった理由を説明した文章です。空欄に入る適切な表現を、Aについては本文中から四字で抜き出して答え、Bについては後のア～エから選んで記号で答えなさい。

男と草児が出会った博物館は、二人にとって「A」の場所だった。しかし、結局二人はそれぞれの日常へと戻っていった。男が「微笑んで」「首を横に振った」のは、「B」から、「C」での交流はやめようと草児に伝えようとしたのである。

ア 母親と祖母に見つかるのと不審がられてしまい今後自分たちは会いにくくなる博物館での非日常的な会話を自分の連れに知られてしまうのは恥ずかしい
ウ 一人で来ていた博物館とは違って今は連れがいるので邪魔してほしくない
エ 博物館で出会った自分たちは互いに連れがいる日常で交わるべきではない

問10 傍線部⑨中の「お菓子」とはどのような存在であるといえますか。次の空欄に入る適切な語を自分で考え、それぞれ指定の字数で答えなさい。ただし、アには食べ物の名前が入ります。

「人は「A 二字」のみにて生くる者にあらず」という聖書の言葉にもあるように、男にとつての「あの人」は非常食のように「イ 一字」をつなぐためだけのものではなく、「お菓子」のように「ウ 一字」も安定させる存在である。

II 傍線部③以降、「男」に対する草児の態度には変化が見られます。その変化の始まりを示す表現として最も適切な「文」を本文中から三十字以内で抜き出し、始めの五字を答えなさい。

問5 次は、傍線部④「エディアカラ紀」に対する草児の気持ちについて述べた文です。空欄に入る最も適切な表現を後のア～エから選び、記号で答えなさい。

様々な種類の生き物が存在しながらも生存競争がなかったとされる「エディアカラ紀」は、そこに生きる者たちが「――」。――世界の象徴であるため、草児はあこがれを抱いているのである。

ア 多様性を尊重し合い、和やかに生きることができる

イ 互いに干渉することなく、心静かに生きることができる

ウ 命の尊さを理解し、争うことがなく平和に生きようとする

エ ありのままの個性を認め合い、協力して共に繁栄しようとする

問6 傍線部⑤「セキノヤマ」の意味を漢字二字で答えなさい。

問7 傍線部⑥中の「今日」の出来事の説明として適切でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 担任の先生の服装を見た瞬間に盛り上がりつつあるクラスの人たちの様子を、一歩引いたところから草児は見ていた。

イ 喋らないように心掛けていた草児だったが、Tシャツの恐竜がティラノサウルスではないことを思わず発言してしまった。

ウ 恐竜の話をつきかけに杉田くんが話しかけてくれたが、草児にとっては関わりが薄かったので彼の名前が分からなかった。

エ 恐竜の違いを分かりやすく説明したのに、先生だけが反応してくれてクラスの人たちは何事もなかったかのように無反応だった。

問11 次は、本文中の波線部A～Eの表現についての説明です。適切でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

A 「二色の絵の具で塗りつぶしたような毎日」とは、草児の生活が単調であることを表す比喩表現である。

B 「バスが、――潜っていく」は、運転の真似をする男の動作を見て、草児が空想の世界に入りこんでいく様子を表している。

C 「椅子が動く音が、やけに大きく聞こえる」は、草児が勢いよく椅子から立ち上がった様子を間接的に伝えている。

D 「メガネも領いた」の「メガネ」は、声を掛けてきてくれた杉田くんのことを比喩を用いて表している。

E 「コティサンゼイが、ガクシホケンが」におけるカタカナ表記は、これらを草児が理解していないことを示している。

問12 次は、本文を読んだ生徒の会話です。これを読み、後の問いに答えなさい。

明子 この小説の題名「タイムマシンに――1――ぼくたち」の「ぼくたち」っていうのは、草児と「男」のことよね。

星子 博物館で出会ったときの草児と「男」が、自分たちをどうとらえているかをうまく表した題名になっていると思うわ。

明子 そうだね。私は最後から二文目の「ひとくち飲んでみたコーラはしっかりと甘かった」というところに共感できたわ。草児が自分の存在意義を確かめられたことが伝わってきたわ。

星子 私もその表現は印象に残った。本文前半の「――2――」という一文は、この表現を導く伏線になっているのよね。ところで、最後の一文の意味は分かった？

明子 まず本文中の「――3――」というたとえは、草児と周囲との心理的な隔たりのことだと読み取ったわ。その隔たりが「男」との交流をきっかけとして段々なくなっていくことへの喜びや安堵感が、最後の一文に表れていると感じたわ。

I 空欄1に入る適切な表現を自分で考え、四字で答えなさい。

II 空欄2に入る最も適切な「文」を本文中から十四字で抜き出し、答えなさい。

III 空欄3に入る最も適切な表現を本文中から四字で抜き出し、答えなさい。

